

想

随



とそこから湧き、そこから形造られたに
ちがいない。

人がいま、最もいまわしいと思う異に
未だ落ちこまないでいられるのは、支え
てくれる自然があるからだ。

繁華街へ入ると、人、人、人の混み合
い、目に飛びこむ物、物、物の氾濫、コ
マーシャルの渦。一変した世界のなか
で、人が活気を取り戻すのは、やはり文
明の魔力であろうか？

年々、秋はめぐり春は来る。その中
で、早や思いがけぬ年輪をとり、坂をの
ぼり頂に立ち、今は美しい裏山の景色に
眼をすぼめながら、秋の終るけはいの山
坂を一つ一つ心に止めて降りていく年頃
であるが、生命の美しさ、有難さが身に
沁みて分るのは嬉しい。

庭の桐の葉が大かた落ちつく頃、私
は街に出た。霜月も末だが、暖かい日で
あった。長い秋をたのしめる幸せな年だ
と、つくづく思いながら、並木の黄葉を
仰ぐ。

人の世のさまざまな浮き沈み、殺はつ
な出来事もよそに、自然は得も云えぬ微
妙な変化を美しく見せてくれる。詩はも

落葉の中の

ヴァイオレット

倉田 千恵子

詩のことは人間の浅はかな智慧の中
で生れよう筈がなく、ことごとく自己の
めぐりに満ち溢れた、光、空の風、潮の
匂い、漂い波……樹々の芽立ち、落葉、
ふる雨や雪、激しい雷、いのちみちみち
た若者の言葉等が、人に対して、永遠へ
の思索をかき立てるからに他ならないと
思う。自然の悠久の中からは取りはづされ
たエアロケットの中では詩は死んだも
のに等しい。

十日程たって街へ出ると、いつかの街
路は一変していた。眼も鮮やかな金の小波

を打っていた銀杏樹のしたのリネアリス
の花園は取り去られ、可憐なヴァイオレ
ットの紫が落葉の下からそよいでいた。
胸がハッとする程の変わりようである。茶
とむらさき如何にも淡い取り合せで、
私をちっと立ち止まらせた。

裏淋しい冬の落葉に、予感でなく早や
咲きみちた春のむらさき。どう考えても
調和を破った世界が、眼の前にある。し
かもそれが美しいと感じられるのは、現
代に触れた私の錯覚であろうか？ 又は
終末意識のなかで求める、青春へのカタ
ルシスがなせる業であろうか？ このよう
な不思議な景色は前になかったとは云
えない。そして過ぎこしの中でも、胸を
さわがせる程の別の人に会わなかったと
は云えない。其の為に、懐疑を深め、悩
み、解き、ふみしめ、或る意味で成長し
て来たのだと思う。

もうどこを見ても冬景色。庭の桐の枝
先にも淡茶色の冬の蕾が立ち上って風に
揺れている。眼の前にクリスマスからあ
わただし年の瀬が続く。私のささやか
な脳裏にも、新年度のプランが少しづつ
脹らんでゆく。

生命あるかな：これが私の実感である。
—昭和五十年十二月稿—
〔「葡萄の会」主宰〕

美しい国スイス

荒尾 延壽

去年の夏のことである。ヨーロッパは
どこも、三十年の暑さにあえいでいた
が、スイスは空、色、光、緑すべてがす
がすがしく、爽涼の国であった。ジュネ
ーブに一泊した明くる日、私は湖辺の町
インターラーケンに車を止めた。その日
八月一日は、スイスの建国祭で、街には
白十字の国旗がはためき、その夜私の泊
ったロワイヤル・ホテルの、すぐ近くの
広場で、お祝いの花火大会が催された。

広場は白川公園の三倍もあろうか、美
しく刈りこまれた緑の芝生で、プラタナ
スの緑樹に囲まれていた。遠い国々から
の観光客や、アルピニスト、それに小田
原提灯をぶら下げた金髪の子どもたちな
ど、町の人たち数千人の人出で賑わっ
た。花火は画図湖の仕掛け花火と違っ
て、最初ものたりなかったが、一斉にド
ンドンと打ち上げられた時、まことに
に壮観で、そのたびに世界の歓声が、澄
みきったスイスの山の星空に遠くこだま
した。

明るく朝早く、車で花火大会の行われ

た公園の端を通ったが、広場は何もな
ったかのように、朝露にぬれ、紙きれ一
つ落ちていない。くまなく眺めても、塵
屑一つない清らかな緑の大園地であつた。
私は不思議に思った。前夜数千の人が埋
めつくした広場なのに、観衆の誰もが落
さなかつたのであろうか……

グリンデルワルトで車をおり、そこか
ら電車でアルプスに登ったが、山の斜面
の牧草地を縫っている登山道路にも、空
缶一つ落ちていなかった。標高三千四百
五十四米のユングフラウ駅で下車した
が、アルプスの頂きは、太陽と風雪に磨
かれ、白く輝き、雄大莊重、私はその偉
容に心うたれ、ただみとれた。

山をおり、スイスの中心ルンゲルンの
町をすぎ、ワグナーの家のある古都ルッ
ツェルンの湖畔で休み、ベスタロッチに
想いをさせてチューリッヒに向つた。ア
ルプスの山麓に点在する、赤い屋根の家
々の窓辺には、ピンクのペコニヤの花鉢
が飾られ、道行く人の心を和ましてくれ
る。この甘美な光景は、チューリッヒか
ら国境を越え、ドイツのハイデルベルグ
に至る家々にも見られた。私はこの心奪
しい景観に接し、ヨハンナ・スピリの
「アルプスの山の娘」ハイジを思い出し
ていた。アルプスの山の清純と素朴を象
徴したような、可憐なハイジやベートル
は、かつて日本の子どもたちにも愛され
たが、私は森と花と湖の国スイスの風光
に魅了された。

九十数年前スピリが書いた、山国スイ
スの貧しさも、セガンティニが描いた
山村の暗さも、今はスイスのどこにもな
い。彼等は努力し、百年の長い歳月を費
し、自分たちの力で、自然の暗さを明る
さに変えていた。

日本に帰って、その現実をみたが……
幸い熊本は、かつてスイスの国民が、美
しい国づくりに傾注したように「美しい
ふるさとづくり」に総力をあげている。
旅人たちが、熊本の美しさに魅せられる
日も、そう遠いことではあるまいと思
う。

(熊本みんぞく学会会員)

長髪風俗論

上田 幸法

世のなかに長髪族というのが増える傾
向にある。初めは、頭髪のやたらに長い
若者たちを「ヒッピースタイル」と称し
て、世間の多くの者のヒンシュクを買っ
たものである。ところが、この長髪は、
嫌われながらも、段々「普通」の若者
の間にも流行しはじめた。そして、いま

は故人になった佐藤栄作さんが総理大臣
を辞めた直後から、頭髪を伸ばし始め、
モミあげまで長くするに及んで、あつと
驚くとともに、長髪こそまでも——と考
えさせられるに至った。

「長髪」という風俗はどんな意味を持
つものであるか。その頃から私はよく
友人たちに問いかけてみた。答えは大
体、次の三つに要約分類された。①床屋
代の節約②モノグサ趣味③他人に嫌悪感
を与えて優越感にひたる。

一応、もっともな「理屈」のようであ
る。この三つをひっくりかえした長髪もある
かも知れない。私はそう思って、そう結
論を出そうとしたが、待てよ、としばし
ためらったのである。

一つの風俗が流行するにはそれにはそ
れなりの「深い」理由があるはずであ
る。たとえ本人が、それに気づいてい
るか、気づいていないかは別である。

いろいろ探求した結果、「現在の長髪
の流行は明治初期の断髪に相当する意識
の改革の形式化でないか」こう思いつく
と、私は、ハッタと横手を打ったのであ
る。ユニークな発見ではないか。われな
がらニンマリと微笑を浮かべて満足し
た。

明治初期の人々、特に保守的な人々
はなかなかチョンマゲを切ろうとしな
かつた。古いというか、伝統に固執すると

いうか。それがいつの間にか、断髪に変
わってしまった社会の推移を考えてみた
のである。当時まっ先きに頭髪を切っ
た人たちは、勇気がいったことだろう。
新しい意識を持った人々たちであったこと
には違いない。

頭髪をバツサリ切った意識と、現在の
長髪化とは、形こそ逆であるが、考え
方、意識、発想、全く同じではないのだ
ろうか。少し屁理屈すぎる結論かも知れ
ないが、楽しいモノの見方ではないか。
独創はいいことだ。

私は去年の六月、約十五年間、お世話
さまになった県庁を辞めた。県庁に居る
ころからしきりに、「長髪」になりたか
つたが、「役人」には、長髪はどうも、
不似合いな気がして、毎月一回、床屋で
「紳士スタイル」に刈ってもらっていた。
た。役人を辞めたら頭髪を「栄作スタイ
ル」にしようというのが夢だった。そこ
で、県庁を辞めた翌日から、今日までま
だ一回も、ハサミを入れたことがない。

妻は私の長髪に反対である。長髪風俗
論(?)をいくら言っても反対である。
見苦しいというのである。不潔とも言
う。そしてハサミを持って私を追いまわ
すのである。年老いた夫婦二人暮らし
に、小さな旋風が起きた。最近では妻も
見馴れたのか、あきらめたのか、まんざ
らではない顔つきである。

(日本現代詩人会員)